

第17回（令和3年度）
教育システム改善のためのアンケート調査報告書

令和4年4月

有明工業高等専門学校
自己点検・評価委員会

目次

1. まえがき	1
2. アンケート結果およびその分析	2
2.1 5年生卒業時アンケート	2
2.2 専攻科修了時アンケート	5
2.3 新入生アンケート	7
2.4 4年次編入生アンケート	11
2.5 本校の卒業生・修了生アンケート	14
2.6 企業アンケート	17
2.7 大学・大学院アンケート	20
3. あとがき	23

別様 アンケート内容と集計結果

- 別様1 5年生卒業時アンケート（令和2年2月実施）
- 別様2 専攻科修了時アンケート（令和2年1月実施）
- 別様3 新入生アンケート（令和3年3月実施）
- 別様4 4年次編入生アンケート（令和3年7月実施）
- 別様5 卒業生・修了生アンケート（令和3年11～12月実施）
- 別様6 主な就職先（企業）および（令和3年11～12月実施）
- 別様7 主な進学先（大学・大学院）へのアンケート（令和4年1～2月実施）

1. まえがき

本校では、教育理念に基づいて設定された学習・教育到達目標を達成できるように教育プログラムを設計・作成し、日々の教育活動を展開しています。この教育プログラムに沿って教育を実践している本校の教育システム(教育体制)は、常時、点検・評価を行い、その結果を検討・分析し、継続的に改善を施し、向上させて行く必要があります。

自己点検・評価委員会(以下、本委員会)では、本校の教育システムの点検、分析そして改善・向上の一環として、6種類のアンケート(一部隔年)を実施しています。卒業・修了直前の本科5年生・専攻科2年生、新入生、4年次編入生、OB・OG(本校卒業生)、企業(本校卒業生の就職先企業)へのアンケートの6種類です。アンケート結果の集計、分析、改善点に関しては「教育システム改善のためのアンケート調査報告書」(以下、調査報告書)として報告しています。過去16回あり、過去の調査報告書の内容に関しては本校ホームページに公開していますので、詳細はそちらにゆずるとして、本年度は前述の6種類のアンケートに加え、編入学先の大学および入学先の大学院へのアンケートを実施しました(表1)。この結果を集計、分析、改善点に関して、調査報告書を作成いたしましたのでここに報告いたします。

表1 R3年度のアンケート実施・分析状況一覧

分析回	調査年度	実施時期	アンケート対象	報告年月	備考
第17回	令和2年度	令和3年1月	R2年度専攻科修了生	R4(2022)年 4月	自己点検・ 評価委員会
		令和3年2月	R2年度本科卒業生		
		令和3年3月	R3年度新入生		
	令和3年度	令和3年8月	R3年度4年次編入生		
		令和3年12月	卒業生・修了生		
		令和3年12月	主な就職先企業		
		令和4年1月	主な進学先		

2. アンケート結果およびその分析

2.1 5年生卒業時アンケート

平成28年4月に改組が行われ5学科体制から、創造工学科(一学科)6コース体制となった。令和2年度の卒業生は創造工学科の1期生となる。したがって、今年度は、教育システムに関する分析として、前年度以前のものと比較等することが困難であるため、結果を初期値として示すこととした。なお、アンケートにおいて、応用化学コース、環境生命コースは別々にアンケートを実施しなければならなかったが、混合して実施しており改善が必要である。本アンケートは2月に電子メールでアンケートの依頼を行い、google formsを利用して実施している。回答率は100%であった。実施方法については問題無いと思われる。

表 2-1-1 過去3年間の5年生卒業時アンケートの実施状況(参考)

	実施時期	対象者数(名)	回答者数(名)	回答率(%)
平成30年(2018)度	平成31年2月	191	186	97
平成31年度(2019) (令和元年度)	令和2年2月	199	117	59 (新型コロナウイルスの影響)
令和2年(2020)度	令和3年3月	183	176	96

※ 以下のコメントではコース名であるエネルギー(E)、応用化学(C)、環境生命(L)、メカニクス(M)、情報システム(I)、建築(A)と略記する。なお、機械工学科、電気工学科、電子情報工学科、物質工学科、建築学科の卒業生はM, E, I, CL, Aとして回答している。

A: 回答者自身に関する設問

【設問1】所属コース

令和2年度において、5年生は4月時点で191名が在籍しており、183名(旧学科学生6名を含む)が卒業している。教務係による統計では、平成28年4月入学時の学生数は223名であった。平成30年4月には3年次に留学生(E1, L1, A1)、平成31年4月に4年次編入学生(E2, C1, L1, M3, I3, A3)が加わっている。最終的に、令和元年度の5年次学生に加わった全学生数は、239名であり、その内の77%の学生が卒業している。

「卒業率(平成23年度定義)」で比較すると、平成31年度の93%より15%程度低く(平成30年度の84%の7%程度低く)なっている。例年は80~90%であり、例年より少し低い状況である。

【設問2】卒業後の進路

卒業生回答者の約65%(114名)が就職しており、平成31年度の73%より8%程度低く(平成30年度の69%より4%程度低く)なっている。進学は30%であり、平成31年度の28%、30年度の29%とほぼ同程度であった。そのうち大学に14%(25名)、専攻科に16%(29名)の学生が進学している。専攻科の進学率は平成31年度が19%、30年度が19%であったことから、例年と同程度の状況である。

B: 教育全般の総括の評価に関する設問

【設問3】一般教育について

「満足している」と「おおむね満足している」の回答が91%である。Iコースが79%と他コース(90%以上)に比べ10%以上低く出ており、今後の動向を注視する必要がある。

【設問4】専門教育について

「満足している」と「おおむね満足している」の回答が89%である。

【設問5-1】教育設備について

「満足している」と「おおむね満足している」の回答が87%である。コースによりばらつきが20%程度あり(CLコースで97%、Iコースで76%)今後の動向を注視する必要がある。

【設問5-2】校内ネットワークやパソコンなどのICT環境について

「満足している」と「おおむね満足している」の回答が68%である。コースによりばらつきが30%程度あ

り（CL コースで 78 %，I コースで 48 %），今後の動向を注視する必要がある。

【(設問 6) 勉強以外の学生生活について】

「満足している」と「おおむね満足している」の回答が 93 %である。全コースで 90 %を越えており，コースによるばらつきも少ない状況である。

【(設問 7-1) 自分自身に実力がついたと思うかについて】

「身に付いたと思う」と「おおむね身に付いたと思う」の回答が 82 %である。コースによりばらつきが 25 %程度あり（A コースで 94 %，I コースで 69 %），今後の動向を注視する必要がある。

【(設問 7-2) 卒業要件を知っているかについて】

卒業要件を「知っていた」「おおむね知っていた」の回答が 92 %である。全コースで概ね 90 %を越えており，コースによるばらつきも少ない状況である。

C : 各教科についての意見・要望

【(設問 8) 一般教育について】

自由意見を数多くいただき回答してもらった卒業生には感謝申し上げる。回答が多いためここで個別に取り上げることはしないが，有意義な回答もあることから，是非ともアンケート結果を参照いただき，関係部署は，今後の改善に活かしてもらいたい。

D : 学習・教育到達目標について

【(設問 9,11,13,15,17,19,21,23,25) 教育の実状】

「適正だったと思う」「おおむね適正だったと思う」が A-1～C-2 の全項目で 90 %を越えており，良好な実状であると考えられる。なお，I コースのみが「A-3 : コミュニケーション能力」で 79 %と低いことから，今後の動向を注視する必要がある。

【(設問 10,12,14,16,18,20,22,24,26) 教育の到達度】

「身に付いたと思う」「おおむね身に付いたと思う」が A-1～C-2 の全項目で 85 %を越えており，良好な教育の到達度実状であると考えられる。

E : その他

【(設問 27) TOEIC 関係の英語教育は役に立ちましたか】

設問が「役に立ったか」であるが選択肢が「よい制度」かを尋ねるようになっており，設問と選択肢に齟齬があった。今後，設問はもう少し練って行う必要がある。せつかくのアンケートを無駄にすることになり，申し訳ありません。

【(設問 28-30) 制度（2年後期のコース選択制度，授業外単位制度，追認制度）に関する設問】

「よい制度」「それなりによい制度」が，「2年後期のコース選択制度」で 80 %，「授業外単位制度」で 90 %，「追認制度」で 90 %を越えており，良好な制度と考えられる。

【(設問 31,32) 有意義かを問う設問（LHR，学校行事）】

「有意義だった」「おおむね有意義だった」が「LHR」で 60 %，「学校行事」で 80 %を越えており，有意義であったと考えられる。

【(設問 33) シラバスの利用について】

「利用した」「それなりに利用した」が 80 %を越えており，またコースによるばらつきもないことから，シラバス利用は問題ないと考えられる。

【(設問 34) レポートのフィードバックについて】

「適正」「おおむね適正」が 85 %を越えており，良好といえる。なお，M コースが 73 %と平均より 10 %程度低く，今後の動向を注視する必要がある。

【(設問 35,36,37) 授業外の学習指導体制について】

「必要」，「それなりに必要」が 85 %，「機能していた」，「それなりに機能していた」が 84 %，「よい対応だった」，「おおむねよい対応だった」が 93 %であり，授業外の学習指導は問題ない状況と考えられる。

【(設問 38) 授業改善アンケートがその後の授業改善に反映されているかについて】

「よく反映されている」，「おおむね反映されている」が 77 %であり，またコースによるばらつきもないこ

とから、授業改善アンケートがうまく機能している状況と考えられる。

【(設問 39) 学習単位(1 単位 45 時間)の自学自習の意識】

「意識した」「ある程度意識した」が 60 %、「あまり意識しなかった」「意識しなかった」が 40 %であり、拮抗に近い状況である。またコースによるばらつきもない。自学自習は学習における基本であることから、「意識した」「ある程度意識した」がより増加することが望まれる。

【(設問 40,41,42,43) 対応についての設問 (学校の事務サービス, 進路支援, 課外活動の指導, 学生相談室)】

「よかった」「おおむねよかった」が「学校事務サービス」で 88 %、「進路支援室」で 94 %、「課外活動の指導」が 92 %、「学生相談室」で 53 % (利用していないが 46 %なので、利用者の 97 %) あり、問題ない対応であったと考えられる。

【(設問 44-1) 寮の運営・指導について】

「よかった」「おおむねよかった」は 33%であり(「入寮経験ない」が 55 %なので、入寮者の 73 %) であり、問題ない対応であったことがうかがえる。

【(設問 44-2) 寮の運営・指導についての意見】

自由意見を数多くいただき回答してもらった卒業生には感謝申し上げます。回答が多いためここで個別に取り上げることはしないが、有意義な回答もあることから、是非ともアンケート結果を参照いただき、関係部署は、今後の改善に活かしてもらいたい。

【(設問 45) 有明高専をよくするためのアイデア】

自由意見を数多くいただき回答してもらった卒業生には感謝申し上げます。回答が多いためここで個別に取り上げることはしないが、有意義な回答もあることから、是非ともアンケート結果を参照いただき、関係部署は、今後の改善に活かしてもらいたい。

【(設問 46) 意見, 要望】

自由意見を数多くいただき回答してもらった卒業生には感謝申し上げます。回答が多いためここで個別に取り上げることはしないが、有意義な回答もあることから、是非ともアンケート結果を参照いただき、関係部署は、今後の改善に活かしてもらいたい。

2.2 専攻科修了時アンケート

専攻科修了生に対するアンケートは平成14年度から実施している。過去3年間の実施状況を表2-2-1に示す。「生産情報システム工学専攻・機械系」については単に「M」と表記し、「電気系」および「電子情報系」は「E」、「I」と、また応用物質工学専攻、建築学専攻は「C」、「A」と表記する。令和2年度の対象者は「M, E, I, C, A」の順で「5, 6, 9, 8, 7」であるが回答者は「1, 3, 0, 0, 0」である。平成14年度(2003年1月)のアンケート開始以来、20年にわたって実施してきた本アンケートは平成22年度に複数の学生の未回答があり83%となったがそれ以外は90%台をキープ(対象者の1名以内の未回答)してきた。昨年度(平成31年度)は70%と落ち込んだが、これは新型コロナウイルスの影響があったと考えている。本年度(令和2年度)は11%(4人)と非常に低いアンケート回収率であった。本アンケートは1月末に電子メールでアンケートの依頼を行い、google formsを利用して実施している。

令和2年度の回答率は11%であった。本委員会では、「令和2年度の分析を行う意味があるのか」を議論し、まずは例年に比べて回答率が低くなった経緯の記録と分析、参考値としての結果を記載することとした。

なお、今回のアンケート結果の分析では「生産情報システム工学専攻機械系」については単に「機械系」と表記し、「電気系」についても同様の表記とする。

表2-1-1 過去3年間の専攻科修了時アンケートの実施状況(参考)

	実施時期	対象者数(名)	回答者数(名)	回答率(%)
平成30年(2018)度	平成31年1月	26	26	100
平成31年度(2019) (令和元年度)	令和2年1月	30	21	70
令和2年(2020)度	令和3年1月	35	4	11

令和2年度の専攻科修了生に対するアンケートは、例年通りに1月末の依頼、実施、2月上旬締め切りのスケジュールで実施した。実施形式は、google formsで作成されたアンケート形式をメールでアドレス送信し、各学生の所持する電子端末を利用して入力を実施する。入力締め切り前に入力済みの人数を担当者に連絡して催促を依頼し、回答数を増やす試みを行った。時間経過は以下の通りである。

- 1/27 修了生および専攻科委員にアンケート実施の依頼メール送信
- 2/8 専攻科委員および自己点検委員に回答数の途中経過メール送信(この時点での回答者3名)
- 2/12 回答締め切り(最終回答者4名)

当年度は、専攻科2年生が集まる際に口頭で依頼しておらず、メールのみでの依頼がなされている。途中経過として電気系3名の入力後は、各委員からの再回答依頼がされており締め切りまでの5日間で回答数が増えることは十分に考えられる。しかしながら、2/8以降の回答は機械系1名のみであり、最終的な回答数は合計4名となった。これ以降は人数の確認、案内は行われていないことがわかった。令和2年度末は、新型コロナウイルスの影響があったが学生の登校は完全に制限されてはいなかった。つまり、学生が研究のまとめ等で登校しながらも、アンケートに回答しなかったことを考えると学生が集まった際に依頼、そして実施することが最善であると考えられる。

以下のような改善が考えられる。

- (1)アンケートの準備が整った1月の早い時期に、登校している学生に依頼する。
- (2)各選考の学生数は多くないため、できる限り集まって一斉に実施する。
- (3)締め切り後に回答数を確認し、3月中旬の修了式までには回答を終えるように指導する。

全学生数は多くても35名程度であることから、回答数を把握して未回答者がいる場合には、最終日までに回答率を100%にすることが望まれる。令和3年度の修了生に対するアンケートでの改善に期待する。

【回答者自身の専攻と進路に関する設問】

令和2年度の修了生数は35名で、その内訳は、機械系(M)5名、電気系(E)6名、電子情報系(I)9名、応用

物質工学専攻(C) 8名および建築学専攻(A) 7名である。回答者は機械系1名、電気系3名の合計4名であり、電子情報系、応用物質系、建築系からの回答は無かった。特に系毎の考察は回答者が判明する可能性があるので控えるが、全回答者で1名が就職、3名が進学であった。

参考と記録のために、前年度の平成31年度までの専攻科修了生数と進学率の関係を以下に示す。近年では進学率が高くなっているが、平成31年度回答者については進学率が66.7%であった。

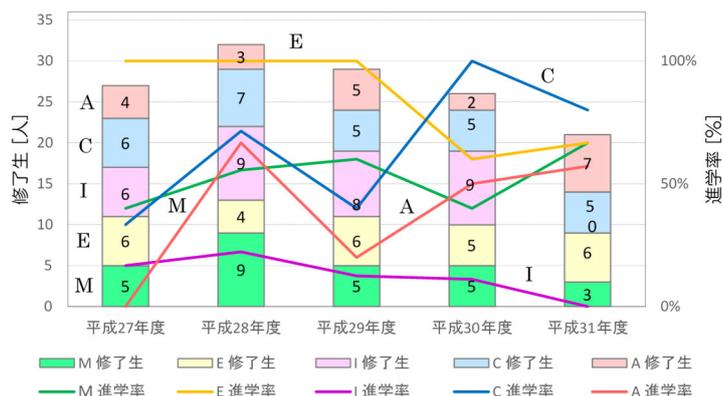


図 2-2-1 【参考】専攻科修了生数と進学率 (平成27年度～平成31年度, 回答者のみ)

【教育全般に関する設問】

専攻科における教育状況に対する満足度は、一般教育、専門教育の内容、教育・研究環境に対して100%が「満足」または「おおむね満足」と回答している。「学業以外の学生生活」「期待した実力がついたか」という設問に対しては75%が満足し、25%はやや不満であるという回答である。学生自身が考えるレベルにもよるが、理想とする学生生活、期待する実力を適切に設定して、それに取り組む環境を提供することは継続した課題であると考えられる。

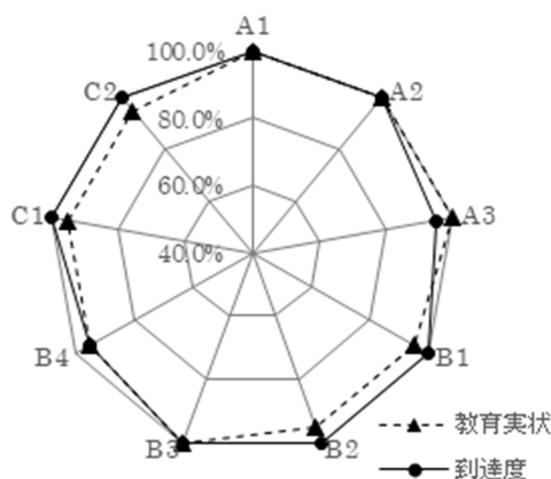


図 2-2-2 【参考】学習教育到達目標に対する教育実状と到達度

【学習・教育到達目標に関する設問】

本校の学習・教育到達目標に対する「到達度」と「教育実状」のアンケート結果を見ると、全ての学習・到達目標における到達度では、100%の学生が「身についた」「おおむね身についた」と回答している。「教育実情」においても、「A3 (コミュニケーション能力)」以外の項目で100%の学生が「適正」「おおむね適正」と肯定的な回答をしている。参考と記録のために平成31年度の結果を掲載する。同年度は、A3の教育状況で100%が適正であると回答しているものの、平成30年度では77%と低かった。回答数は少ないが、コミュニケーション能力に関する教育実情については、毎年度、注意して見守ることで全体の改善につながると考えられる。

【その他】

「ポスターセッション」については「満足」あるいは「おおむね満足」と回答した割合は100%であった。前年度は満足度38%で非常に低かったことと比較すると、参加した学生の満足が得られたと考えられる。専攻科での少人数授業形態、シラバスの利用、学会発表、特別研究発表会、学生相談室、進路支援、事務サービス等の質問に関しては、100%の学生が「満足」「おおむね満足」と回答している。一方、TOEICや教員の授業時間外対応に関しては25%が不満に感じており、学生が求めるレベルにもよるが常に確認していくことも日常の改善につながると考えられる。TAの経験は非常に有益だったという学生が100%であった。

最後に、平成30年度から追加された「専攻科の修了要件の認知度」に関する設問について、100%の学生が要件の内容、確認方法を知っていると回答している。回答数は非常に少なく、一概に例年と比較することはできないが、回答した全学生が理解していたことは評価されることである。

令和3年度は、アンケート実施方法を再確認し、しっかりと実施されることを期待する。

2.3 新入生アンケート

直近3年間に実施した新入生に関するアンケートの実施時期および回答者数等は表2-3-1の通りである。アンケート内容は高専機構の入学動機アンケートを基本としている。今回の分析は、令和3年度における新入生を対象とし、以前にも同様の質問項目がある場合はその値を参照・比較する形で行った。本アンケートは3月の入学手続き説明会の際に配布・実施している。回答率は100%であった。実施方法については問題無いと思われる。

表2-3-1 新入生保護者および新入生アンケートの実施状況

	実施時期	対象者数(名)	回答者数(名)	回答率(%)
R1(2019)年度	H31年3月	新入生209	209	100
R2(2020)年度	R2年3月	新入生209	209	100
R3(2021)年度	R3年3月	新入生208	208	100

* 前年度からの留年者等を除いた学生(新規入学生)を「新入生」と定義して、本アンケートの対象としている。

【(設問1) 有明高専を最初に知った時期】

表2-3-2に有明高専を最初に知った時期に関するアンケートの結果を示す。1つのみ回答可としている。年度により多少の差はあるが、年度によらず小学校高学年～中学校二年生で75%を越えて認知していることがわかる。

表2-3-2 有明高専を最初に知った時期(%)

時期	R3	R2	R1
小学校入学前	2	4	3
小学1～3年	6	7	6
小学4～6年	29	28	24
中学1年	27	21	29
中学2年	23	25	22
中学3年	13	15	16
その他	0	0	0

【(設問2) 受験検討時期】

表2-3-3に受験検討時期に関するアンケートの結果を示す。1つのみ回答可としている。年度により多少の差はあるが、受験の検討は年度によらず中学校二年生、三年生で70%を越えていることがわかる。また、小学生の高学年からの受験検討が増加する傾向が令和2年度から見てとれることから(平成30年は0%)、今後の動向を注視する必要がある。

表2-3-3 受験検討時期(%)

時期	R3	R2	R1
小学1～3年	0	3	1
小学4～6年	10	12	3
中1	16	17	13
中2前半	36	28	10
中2後半			22
中3第1学期	38	40	27
中3第2学期			22
中3第3学期			2
その他	0	0	0

【(設問3) 受験決定時期】

表2-3-4に受験決定時期に関するアンケートの結果を示す。1つのみ回答可としている。ほとんどの者が中学校に入学してから、特に中学3年の第1～2学期に決定していることが分かる。なお、高専の受験レベルは低くないことから、中学校でのある程度の学習レベルが要求される(調査書は中学1年生の成績が含まれる)ため、受験校決定というのが有明高専とどこを考えていたのか、例えば難関高等学校なのか他高専(例えば久留米高専や熊本高専など)なのかなどは本アンケート結果からは読み取ることができないのでアンケートの回答項目および内容の工夫が必要であると思われる。

表 2-3-4 有明高専受験を決定した時期 (%)

時期	R3	R2	R1
小学 1～3 年	3	7	0
小学 4～6 年			1
中 1	7	8	2
中 2 前半	7	4	2
中 2 後半	15	11	5
中 3 第 1 学期	25	31	27
中 3 第 2 学期	39	34	53
中 3 第 3 学期	4	4	10
その他	0	0	0

【(設問 4) 関心を持ったきっかけ】

表 2-3-5 に関心を持ったきっかけに関するアンケート結果を示す。5 つまでを回答可としているため、結果は母数に対する回答数のパーセンテージとしている。また、パーセンテージの高い項目上位 3 つの項目の数字を網掛けにしている。年度によって多少の差があるが、「家族・親族」、「オープンキャンパス・見学会」、「パンフレット」が例年同様上位を占めている。家族・親族は年々増加傾向にあり（平成 30 年は 49%）、今後の動向を注視する必要がある。

表 2-3-5 関心を持った経緯 (%)

項目	R3	R2	R1
高専主催説明会	15	27	24
体験入学	26	19	
オープンキャンパス・見学会	<u>52</u>	<u>48</u>	<u>60</u>
学校行事（高専祭・体育祭等）	15	31	26
高専体育大会	2	3	3
ロボコン・デザコン・プロコン・プレコン	17	17	13
公開講座	1	1	0
出前授業・訪問実験	3	3	3
地域イベントなどでの科学体験教室	4	2	1
パンフレット	<u>38</u>	<u>40</u>	<u>42</u>
ホームページ	<u>38</u>	36	39
中学校主催説明会	16	17	22
家族・親族	<u>63</u>	<u>60</u>	<u>55</u>
中学教師	11	12	15
友人・先輩	21	21	22
塾	11	14	12
新聞・雑誌・漫画等情報誌	1	2	0
TV・ラジオ	1	2	0
動画サイト、SNS など	9	6	5
進学情報サイトなど	6	10	
国公立高専合同説明会	3		
その他	7	2	0

【(設問 5) 志望動機】

表 2-3-6 に志望動機や感じていた魅力に関するアンケートの結果を示す。5 つまでを回答可としているため、結果は母数に対する回答数のパーセンテージとしている。また、パーセンテージの高い項目上位 3 つの項目の数字を網掛けにしている。年度によって多少の差があるが、「早期専門教育」、「就職の実績」、「将来の夢の実現」が例年同様上位を占めている。

表 2-3-6 志望動機 (%)

項目	R3	R2	R1
特色のある授業・カリキュラム	35	26	27
5年一貫教育	42	46	34
早期専門教育	59	64	52
就職の実績	52	54	60
大学進学実績	15	12	12
専攻科	8	10	6
JABEE 認定	1	1	4
資格取得	14	17	10
教員	1	1	0
寮	5	5	5
立地・通学環境	6	3	4
施設・設備	26	19	18
校風	21	17	20
学費	8	4	7
ロボコン・デザコン・プロコン・プレコン	11	11	8
課外活動	4	6	2
学校行事（高専祭・体育祭等）	10	12	7
将来の夢の実現	49	60	54
学びたいことを学べる	38	38	43
海外留学・国際交流	21	18	13
家族・親戚	20	17	21
中学教師	1	2	5
先輩・友人	3	5	5
塾	2	2	1
特になし		0	
その他	1	0	0

【(設問 6) 入学前に知りたかったこと】

表 2-3-7 に入学前に知りたかったことに関するアンケートの結果を示す。これは R2 年度から新しく設定された質問事項であるため 2 年間のデータとなる。5 つまでを回答可としているため、結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。また、パーセンテージの高い項目上位 3 つの項目の数字を網掛けにしている。年度によって多少の差があるが、2 年間とも「授業」、「学則」、「課外授業」、「留年・退学」が上位を占めている。これらの点は発信していく必要があると考えられる。

表 2-3-7 入学前に知りたかったこと (%)

項目	R3	R2
高校との違い	14	12
授業	69	51
インターンシップ	19	22
進路（進学）	13	11
進路（就職）	16	10
学費	7	7
国際交流、	22	21
学則	46	43
寮	24	20
課外授業	36	34
留年・退学	39	30
満足度	8	16
その他	1	0

【(設問7) 『高専』という選択』を読んだことがあるか。】

表2-3-8に高専機構が作成した冊子『高専』という選択』を読んだことがあるかの有無に関するアンケートの結果を示す。年々読んだことのある新入生の割合が減っていること(平成30年は64%)がはっきりとわかる結果となった。

表2-3-8 『高専』という選択』を読んだことがあるか (%)

	R3	R2	R1
読んだ	12.5	30	51
読んでいない	87.5	70	49

【(設問8) 「キラキラ高専ガールになろう!」を読んだことがあるか】

表2-3-9に高専機構が作成した冊子「キラキラ高専ガールになろう!」を読んだことがあるかの有無に関するアンケートの結果を示す。3年間連続で読んだことのある新入生の割合が減っていること(平成30年は18%)がはっきりとわかる結果となった。なお、令和3年度入学生は配布が行われていなかったということである。

表2-3-9 「キラキラ高専ガールになろう!」を読んだことがあるか (%)

	R3	R2	R1
読んだ	7	21	26
読んでいない	93	79	74
(入学生のうち女子学生の割合)	30	28	32

2.4 4年次編入生アンケート

直近3年間に実施した編入学生に関するアンケートの実施時期および回答者数等は表2-4-1の通りである。今回の分析は、令和3年度における編入学生を対象とし、以前にも同様の質問項目がある場合はその値を参照・比較する形で行った。本アンケートは7月に電子メールでアンケートの依頼を行い、google forms を利用して実施している。回答率は100%であった。実施方法については問題無いと思われる。

表2-4-1 4年次編入生アンケートの実施時期および回答者

	実施時期	対象者数(名)	回答者数(名)	回答率(%)
令和元年度	令和元年6月	12	12	100
令和2年度	令和2年12月	9	8	89
令和3年度	令和3年7月	13	13	100

【(設問1) 所属コース】

エネルギー4名、応用化学1名、環境生命0名、メカニクス2名、情報システム4名、建築2名であった。

【(設問2~4) 通学生・寮生の区別、通学方法、寮生活について】

表2-4-2に通学生・寮生の区別、通学方法、寮生活についての結果を示す。通学生・寮生の区別、通学方法、寮生活について、年度により多少の差はあるが、それぞれこの順で、「寮生」が半数を越える程度、「公共交通機関」「自転車」がメイン、寮生活に「心配がない」という主旨の回答が80%を越えているという状況で、例年と同様の傾向であった。編入学生は年齢的なこともあるのかもしれないが、寮生活に特段の不安を感じていないことがうかがえる。

表2-4-2 通学生・寮生の区別、通学方法、寮生活について (%)

回答項目	R3	R2	R1
自宅通学	23	50	33
下宿	8	0	0
寮	69	50	66
徒歩	0	20	33
公共機関	75	40	17
自転車	25	40	33
バイク	0	0	17
自家用車	0	0	0
その他	0	0	0
寮生活に心配ない	50	75	50
おおむね心配ない	38	25	38
やや心配がある	13	0	13
寮生活に心配あり	0	0	0

【(設問5,7) 有明高専の認知と情報取得方法】(複数回答可)

表2-4-3に有明高専の認知と情報取得方法についての結果を示す。また、パーセンテージの高い項目上位2つの項目の数字を網掛けにしている。有明高専の認知は、年度により多少の差はあるが、「以前から」が例年同様1位であった。また進路決定の際の有明高専の情報は、R1年度まではホームページが1位(H30年度の1位はホームページ)であったが、ここ2年間は「高校の先生から」が1位となっており、傾向の変化も考えられることから、注視が必要である。

表 2-4-3 有明高専の認知と情報取得方法 (%)

回答項目	R3	R2	R1
以前から	42	50	42
ホームページ	0	0	0
ポスター・パンフレット	0	0	0
高校の先生	16	38	16
塾からの情報	0	0	0
高校における学校説明会	32	0	32
知人	5	13	5
その他	5	0	5
ホームページ	38	27	37
ポスター・パンフレット	4	23	11
オープンカレッジ	0	9	4
高校の先生	50	32	15
塾からの情報	0	0	4
高校における学校説明会	4	5	22
知人	4	5	4
その他	0	0	4

【(設問 6,8) 受験決定時期と入学の決め手】(複数回答可)

表 2-4-4 に有明高専受験決定時期と入学の決め手についての結果を示す。また、パーセンテージの高い項目上位 3 つの項目の数字を網掛けにしている。有明高専受験決定時期はこの 3 年間バラバラで傾向はみてもとれない。なお、平成 30 年は「高校 2 年生 3 学期」であったころから、決定時期が遅くなっていることも考えられ、今後の動向を注視する必要がある。また、有明高専入学の決め手は、年度により多少の差はあるが、「就職率が高い」が 1 位であった(平成 30 年の 1 位は「就職率が高い」)。しかし、昨年度から「経済性」が急伸しており、コロナ禍も少なからず影響している可能性も考えられるが、今後の動向を注視する必要がある。

表 2-4-4 有明高専受験決定時期と入学の決め手 (%)

回答項目	R3	R2	R1
締切直前	0	13	8
昨年の 5 月頃	23	25	8
昨年の 4 月頃	46	0	17
高校 2 年生 3 学期	23	13	42
高校 2 年生 2 学期	8	25	0
高校 2 年生 1 学期	0	13	0
高校 1 年生頃	0	13	17
それ以前	0	0	8
就職率が高い	24	11	35
大学に進学できる	9	21	15
専攻科へ進学できる	9	5	12
学生教育がしっかりしている	6	11	4
経済性	21	21	4
JABEE 認定	0	0	0
寮がある	12	5	12
高校・塾の先生の進路指導	12	16	4
立地・環境	3	5	4
設備	0	5	8
その他	3	0	4

【(設問 9) 入学後の心配】(複数回答可)

表 2-4-5 に有明高専入学後の心配の結果を示す。また、パーセンテージの高い項目上位 2 つの項目の数字を網掛けにしている。年度により多少の差はあるが、「学業」が例年同様 1 位であった。

表 2-4-5 入学後の心配 (%)

回答項目	R3	R2	R1
なし	21	33	6
学業	43	33	63
寮生活	14	0	6
学校生活	7	0	19
寮	7	22	6
その他	7	11	0

【(設問 10) アドミッションポリシーに対する意識】

表 2-4-6 にアドミッションポリシーに対する意識の結果を示す。また、パーセンテージの上位項目の数字を網掛けにしている。年度により多少の差はあるが、「意識した」が「意識しなかった」を上回った。年度によっては、「意識した」と「意識しなかった」が肉薄することもあることから(平成 30 年は「意識した」が 83%)、今後の動向を注視する必要がある。また、アドミッションポリシーに対する自己評価などのアンケート項目も必要となるであろう。

表 2-4-6 アドミッションポリシーに対する意識 (%)

回答項目	R3	R2	R1
意識した	58	75	58
意識しなかった	42	25	42

【高専卒業後の進路について】

表 2-4-7 に高専卒業後の進路についての結果を示す。また、パーセンテージの高い最上位項目の数字を網掛けにしている。年度により多少の差はあるが、「就職」が例年同様 1 位であった(平成 30 年は「就職」が 67%)。なお、「就職」のパーセンテージは年々減少しており、今後の動向を注視する必要がある。

表 2-4-7 卒業後の進路 (%)

回答項目	R3	R2	R1
就職	38	38	58
専攻科	31	13	8
大学編入学	8	50	25
考えていない	0	0	8
その他	23	0	0

【有明高専への要望, 自由意見】

今年度はゼロであった。

2.5 OB・OG アンケート

OB・OG アンケートは隔年で実施している。今回を含む過去 5 回分の実施時期および回答者数を表 2-5-1 に示す。今回は、令和 3 年 11 月に、平成 29～30 年度卒業生、(2017 年 3 月～2018 年 3 月卒業：274 名) および令和元～2 年度専攻科修了生 (2019 年・2020 年 3 月修了：53 名) を対象に実施したアンケートの分析結果となる。本アンケートは 11 月に書面 (郵送) で依頼を行い、google forms を利用して実施している。なお、郵送が届かなかったもの (8 名) はアンケート対象者数から除外した。今回は、アンケート調査への回答率の改善を図るため、電子メールによる回答の依頼、同窓会報に本調査への協力依頼文を出すなどの対応を行った。アンケート回答は 49 名で回答率は前回比で 8 ポイント増となった。回答者の内訳は、本科卒業生 35 名、専攻科修了生 14 名である。また、本調査の目的も教育内容そのものを見直すためのデータを収集するという点に限定することとし、本校施設環境や学生生活に関する項目は調査項目から外す等、調査票の改善を図った。このことは結果として、回答者の負担軽減にもつながり回答率が上がったと考えている。

表 2-5-1 OB・OG アンケートの実施状況

	実施時期	対象者数 [名]	回答者数(名) 本科(専攻科)	回答率(%)
平成 25 年度	2013 年 9 月	332 名 (2010・2011 年 3 月卒業)	44 (17)	13
平成 27 年度	2015 年 9 月	335 名 (2012・2014 年 3 月卒業)	66 (16)	20
平成 29 年度	2017 年 9 月	552 名 (2013～2015 年 3 月卒業・修了)	46 (13)	8
令和元年度	2019 年 10 月	648 名 (2015～2017 年 3 月卒業・修了)	44 (10)	7
令和 3 年度	2021 年 11 月	327 名 (2017・2018 年 3 月卒業、2019 年・2020 年 3 月修了)	49(14)	15

【準学士課程卒業生】

回答者の 7 割は、研究・開発、設計、生産・施工現場およびメンテナンスといった技術系の業務に携わっている。この数値は前回調査とほぼ同じである。また、資格の取得件数はのべ 32 名で、出身学科別では M：7 名(一人あたり 1.4 件)、E：10 名(一人あたり 0.9 件)、I：5 名(一人あたり 1.1 件)、C：7 名(一人あたり 0.9 件)、A：3 名(一人あたり 0.5 件)である。

(1) ディプロマ・ポリシーに関する設問

平成 29 年度から、有明工業高等専門学校教育において導入したディプロマ・ポリシーに関するアンケートに対する分析結果。

本科のディプロマ・ポリシーで育成目標として掲げられた 5 つの資質・素質を持つ技術者のうち、必要度が高いと思われるものから 3 つを選択する設問 (複数回答可) を実施した。「1. 幅広い工学に関する基礎知識と主体性を身に付けた技術者」が 17 名(49%)、「2. 専門工学に関する高度な知識と創造性に富み、実践力を身に付けた技術者」が 15 名(43%)、「3. 自己啓発・向上能力に富み、「ものづくり」を通して社会の発展に貢献できる技術者」が 15 名(43%)、「4. 多様な価値観を理解し、学際的な技術分野で活躍できる技術者」が 14 名(40%)とほとんど変わらなかったが、「5. 国際社会で活躍できる広い視野と教養をもつ技術者」は 5 名(23%)であり、他の 4 つに比べ低かった。「5」の項目は今後の注視が必要と思われる。

本科の学習・教育到達目標に関して、ディプロマ・ポリシーを満たすために定めている卒業までに達成すべき 9 つの学習・教育到達目標のうち、不要だと思われる項目があれば選択する設問 (複数回答可) を実施した。不要だと思われる項目が「ない」と選択したのは 21 名(60%/前回比 8 ポイント減)であった。一方、「ある」を選択した回答では、多く選ばれた項目は「3. コミュニケーション能力」が 10 名(20%)、次に「6. 実践力」と「8. 課題探求能力」が 8 名(16%)、「7. 学際的知識」と「9. 課題解決能力」が 5 名(10%)となった。

学習・教育到達目標において、取り入れることが望ましい事項が「ある」と答えたのは 1 名(3%)で、内容は「コミュニケーション能力」を挙げた。

(2) 有明高専「本科」卒業時における、有明高専本科での各種教育に対する到達度や環境等への満足度に関する

る設問

<各授業科目の理解度に関するアンケート>

一般教育（文科系科目）に対して、肯定的評価（「身に付いたと思う」と「おおむね身に付いたと思う」）を選択した回答者数は24名(69%)で、前回比で30ポイント増であった。一般教育（理科系科目）では、前回から3ポイント増の32名(91%)が肯定的評価を選択していることから、非常に良い評価を維持していると言える。同様に、専門教育に対しても肯定的評価に着目すると、専門教育（講義などの座学系科目）と専門教育（実験、実習、演習、卒研などの実技系科目）の両項目ともに約9割が肯定的な評価をする。数値は、前者は、前回比5ポイント増の34名（87%）で、後者は前回比9ポイント増の33名（91%）であった。

(3) その他の設問

<高専卒業時において、学生が最も身に付けておかなければならない能力に関するアンケート>(複数選択可)

選択者数が一番多かった項目は「9.コミュニケーション能力」で28名（80%）、次が「4. 学習意欲」で22名（63%）であった。前回の調査では、「4. 学習意欲」は6番目で、「9.コミュニケーション能力」は前回の調査では選択肢としては用意されておらず、今回の調査から選択肢の中に加えられたものである。なお、前回一番多くの回答を集めた「1. 専門の基礎知識」は、今回調査では18名（51%）で、3番目に多い回答項目であった。アンケート年度による変動があり、今後の動向を注視する必要がある。他の選択肢で選択数の多い項目から順に列挙すると、「5. 語学力」「7. プレゼンテーション能力」「6. 創意・工夫能力」が10名以上(30%以上)であり、「3. 一般的教養」「8.健康・体力」「2. 専門知識の応用力」が続いた。

高専ではカリキュラムの中に実技系科目（実験・実習・演習）を大学等と比較して多く配置しており、これらの科目を学んだことが、現在の仕事の上で役に立っているかという設問では、肯定的評価（「役に立っている」と「おおむね役に立っている」）を選択した回答者は24名(69%)であり、前回より29ポイント減であった。高専の強みでもある部分なので、この動向についてはしっかり見ていく必要がある。

(4) 有明高専がさらによくなるためのアイデア

貴重な意見が多数寄せられた。「多くの実験を行うことにより実践力を身に付ける」、「教員と学生の距離感を意識する」といった取り組みは、今後も継続して続けて欲しいという意見が寄せられた。その他、必要な取組みとして、「資格取得を推奨する」、「実際の現場で技術がどのように使われているか伝える」、「自発的行動を促す授業を導入する」、「コミュニケーション能力、説明能力、語学力を養う授業を導入する」といった意見が寄せられている。

【専攻科課程修了生】

回答者の半数は、研究・開発、設計、生産・施工現場、メンテナンス、および品質管理といった技術系の業務に携わっている。また、資格の取得名数はのべ5名で、出身学科別ではI:2名、C:2名、E:1名である。

(1) ディプロマ・ポリシーに関する設問

本科のディプロマ・ポリシーで、「育成目標として掲げられた5つの項目」のうち、必要度が高いと思われるものをすべて選択するアンケートに関する分析結果。

「1. 幅広い工学に関する基礎知識と主体性を身に付けた技術者」が7名(50%)、「2. 専門工学に関する高度な知識と創造性に富み、実践力を身に付けた技術者」が8名(55%)、「3. 自己啓発・向上能力に富み、「ものづくり」を通して社会の発展に貢献できる技術者」が7名(50%)、「4.多様な価値観を理解し、学際的な技術分野で活躍できる技術者」が11名(79%)、「5.国際社会で活躍できる広い視野と教養をもつ技術者」は5名(36%)であった。他の4つに比べ「5」の項目は低く、準学士課程と同様の傾向があったことから、「5」の項目は今後の注視が必要と思われる。

「本科卒業までに達成すべき9つの学習・教育到達目標」のうち、不要だと思われる項目が「ない」と選択した回答者数は9名（64%）であった。「ある」を選択した回答で最も多いものは「1. 多面的考察力」と「3. コミュニケーション能力」で、それぞれ3名（「ある」のうちの60%）、次に、「4. 工学の基礎知識」と「9. 課題解決力」で、それぞれ2名（「ある」のうちの40%）であった。

学習・教育到達目標において取り入れることが望ましい事項が「ある」とする意見は2名で、内容として

は「国際化，多様化が進む中で政治的問題・背景，国ごとの価値観の違いに対する理解も必要と考える」と「メンタル力」といった意見が寄せられた。

専攻科のディプロマ・ポリシーで、「育成目標として掲げられた3つの項目」のうち，必要度が高いと思われるものをすべて選択するアンケートに関する分析結果。

「育成目標1～3はいずれも必要度が低い」を選ぶ者はいなかった。目標別で一番多く選ばれた項目は「1.物事を多面的に考察できる力，社会における技術者の責任を自覚できる高い倫理観，および優れたコミュニケーション能力を備えた高度な技術者」で11名（79%）であった。この他の目標については，「3.課題の探求能力に優れ，またその課題を解決する方法を提案できる高度な技術者」は7名（50%），「2.工学の基礎知識，工学の専門知識および高度に融合された学際的知識を有し，実践力に富む高度な技術者」は6名（43%）が選んだ。「2」「3」の項目については今後の動向を注視する必要がある。

学習・教育到達目標において取り入れることが望ましい事項があるか，の設問で「ある」と答えた者はいなかった。

(2) 有明高専「本科」卒業時における，有明高専本科での各種教育に対する到達度や環境等への満足度に関する設問

<各授業科目の理解度に関するアンケートについて>

一般教育（文科系科目）に対して，肯定的評価（「身に付いたと思う」と「おおむね身に付いたと思う」）を選択した回答者数は10名（71%）で，前回比31ポイントアップであった。一般教育（理科系科目）では，前回比30%増で，14名全員が肯定的評価を選択している。同様に，専門教育（講義などの座学系科目）も14名全員が肯定的評価をしており，専門教育（実験，実習，演習，卒研などの実技系科目）は13名（93%）が肯定的評価を選択した。なお，専門教育（実験，実習，演習，卒研などの実技系科目）は，前は全員が肯定的に評価していた。

(3) その他の設問

<「就職・進学後のいまの状況を考慮し，有明高専本科卒業時から専攻科修了時の間に学生が特に身につけておかなければならない能力」について>

「4.学習意欲」と「9.コミュニケーション能力」が高く，前者は11名（79%），後者は10名（71%）であった。これらに続いて「7.プレゼンテーション能力」が9名（64%），「5.語学力」が5名（36%）であった。また，「有明高専のカリキュラムで学んだこと（講義，実験，実習，演習，卒業研究など）が，現在，役に立っているか」の設問では，14名全員が肯定的な立場（「役に立っている」「概ね役に立っている」）を示した。

高専専攻科修了生と大学学部卒業生との間に業務遂行能力の違いはあるかという設問では，「ある」を選択した回答者が9名（64%）で，「ない」を選択した回答者は5名（36%）であった。ここで，「ある」を選択した回答者から挙げられた違いの内容を見てみると，専攻科修了生のほうが優れているとして挙げられた意見は「数学的センス」「専門知識の習得度，応用力」「プログラミング能力に限って書くと，基礎的のアルゴリズムの理解と，プログラミングに関する実践的な周辺知識及び背景にある知識量」などであった。一方，大学学部生のほうが優れている点として挙げられたことは，「自主性，コミュニケーション能力」「教養，ビジネスへの関心，コミュニケーション能力，自己成長能力」であった。このうち「コミュニケーション能力」は，前回調査でも指摘されていたことである。

2.6 企業アンケート

現在までに実施した企業アンケートの実施状況一覧は表 2-6-1 のとおりである。企業アンケートは2年ごとに実施しており、今回は令和3年度に実施したアンケートの分析である。本アンケートは11月に書面(郵送)で依頼を行い、google forms を利用して実施している。

表 2-6-1 企業アンケートの実施状況一覧

	実施時期	調査企業数 (社)	回答企業数 (社)	回答率 (%)
平成 15 年度	平成 15 年 11 月	500	153	31
平成 17 年度	平成 17 年 12 月	500	151	30
平成 19 年度	平成 19 年 12 月	442	159	36
平成 21 年度	平成 21 年 8 月	424	158	37
平成 23 年度	平成 24 年 9 月	422	137	32
平成 25 年度	平成 25 年 9 月	354	120	34
平成 27 年度	平成 27 年 9 月	335	103	31
平成 29 年度	平成 29 年 9 月	351	126	36
平成 31 年度	令和元年 10 月	346	115	33
令和 3 年度	令和 3 年 12 月	223	91	41

【回答数】

回答社は全体で 223 社中 91 社であり、回答社数は前回の令和元年度(平成 31 年度)より減少したものの、回答率は増加した。過去 10 年間で最も高い回収率であった。調査方法は、平成 25 年度以降、原則 Web 入力のみである。調査方法による回答率の変動は大きくないと考えられ、より高いレベルでの回収率を目指し、アンケートの実施時期、調査企業の選定、回答方式などの実施方法を検討していく必要がある。なお、91 社全てが全ての設問に回答しているわけではなく、アンケート集計表では 91 件の回答に満たないところがある。

【日本技術者教育認定機構(JABEE)の認定終了に関する設問】

本校は令和 2 年度をもって日本技術者認定機構(JABEE)の継続審査を受信せず JABEE 認定が終了したことを踏まえて、継続審査を受信しなかったことに関して調査を行った。回答状況を表 2-6-2 に示す。「わからない」との回答が 70%近くを占めており、回答いただいた多くの企業において、JABEE の認定が認知されていない・重要視されていない・興味がないなどの表れと捉えることもできる。また、「継続した方が良かった」は 12%、「継続の必要性は感じない」は 16%であり、JABEE 認定の終了は回答いただいた企業の意見はほぼ二分する結果となった。

表 2-6-2 JABEE 認定終了に関する回答状況

1.継続した方が良かった	11	12%
2.継続の必要性は感じない	15	16%
3.わからない	62	68%
4.その他	3	3%
計	91	100%

【ディプロマ・ポリシーに関する設問 (本科)】

平成 29 年度より制定した本科のディプロマ・ポリシーに関する調査を行った。前回の平成 29 年度の調査と同様に重要度の高いものを複数回答で選択してもらった。回答のあった 73 社の回答状況を表 2-6-3 に示す。企業の立場から比較的重要度が高いと認識されている項目は、「幅広い工学に…」で 90.4%(前回 67.8%)、「専門工学に…」で 60.3%(前回 54.8%)、「自己啓発・能力向上に…」で 82.2%(前回 74.8%)であった。一方、「多様

な価値観を理解し…」は31.5%(前回25.2%),「国際社会で活躍できる…」は19.2%(前回11.3%)であり、これらの項目は前回同様に重要視されていない傾向となった。今後の注視が必要と思われる。

表 2-6-3 本科のディプロマ・ポリシーに関する回答状況

1.幅広い工学に…	66	72.5%
2.専門工学に…	44	48.4%
3.自己啓発・向上能力に…	60	65.9%
4.多様な価値観を理解し…	23	25.3%
5.国際社会で活躍できる…	14	15.4%
計	207	

【ディプロマ・ポリシーに関する設問（専攻科）】

平成29年度より制定した専攻科のディプロマ・ポリシーに関する調査を行った。前回の平成29年度の調査と同様に重要度の高いものを複数回答で選択してもらった。回答のあった17社の回答状況を表2-6-4に示す。企業の立場から重要度が高いと認識されている項目は、「物事を多面的に…」は100%(前回80.9%),「課題の探求能力に優れ…」は76.5%(前回51.3%)であり、それぞれ前回調査より重要度が増していると考えられる。一方「工学の基礎知識…」については41.2%(前回41.7%)で、前回調査から変わりがなかった。

表 2-6-4 専攻科のディプロマ・ポリシーの重要度に関する回答状況

1.物事を多面的に…	17	100.0%
2.工学の基礎知識…	7	41.2%
3.課題の探求能力に優れ…	13	76.5%
計	37	

【卒業生に関する設問】

本科卒業生の入社時の学力、資質・能力に関する評価に関する調査については、回答のあった82社の回答状況を表2-6-5に示す。入社時の学力、資質・能力については、「満足」が40.2%(前回34.5%),「おおむね満足」が47.6%(前回49.6%)であり、その合計も87.8%(前回84.1%)で前回調査につづいて満足度は高いことがうかがえる。

表 2-6-5 本科卒業生の入社時の学力、資質・能力に関する回答状況

1.満足	33	40.2%
2.おおむね満足	39	47.6%
3.普通	5	6.1%
4.やや不満	0	0.0%
5.不満	2	2.4%
6.わからない	3	3.7%
計	82	100%

【修了生に関する設問】

専攻科修了生の入社時の学力、資質・能力に関する評価に関する調査については、回答のあった20社の回答状況を表2-6-6に示す。入社時の学力、資質・能力については、「満足」が25.0%,「おおむね満足」が55.0%であり、その合計も80.0%であった。前回調査と質問内容が若干異なるため単純比較はできないが、前回調査における採用実績のある企業における満足度が80%であったことにつづいて満足度は高いことがうかがえる。

表 2-6-6 専攻科修了生の入社時の学力、資質・能力に関する回答状況

1.満足	5	25.0%
2.おおむね満足	11	55.0%
3.普通	3	15.0%
4.やや不満	0	0.0%
5.不満	0	0.0%
6.わからない	1	5.0%
計	20	100%

【取得してほしい資格に関する設問】

各業種に対応した資格が回答されており、取得して欲しい資格については多岐に及ぶ。当然ながら、回答が得られた企業の業種に因るところが大きい。92社中41社(本科卒業生)および7社(専攻科修了生)が何らかの資格取得を望まれている企業が有り、業種によっては現状のカリキュラムで資格取得の支援が可能であれば、アピールポイントとすることが可能かもしれない。

【専攻科修了生と大学卒業生の違いに関する設問】

専攻科修了生と大学卒業生の業務遂行能力の違いについて回答のあった 20 社の回答状況を表 2-6-7 に示す。業務遂行能力について違いは「ない」との回答が 75%であった。前回までの 60%程度と大差はないと考えられる。また差が「ある」または「少しはある」と回答においては 3 社のコメントも得られた。これらは専門知識やスキルなどは大学生よりも長けているとの評価がある一方、広い視野は大学卒業生の方が培われているとのコメントがあった。

表 2-6-7 専攻科修了生と大学卒業生の違いに関する回答状況

1.ある	1	5%
2.少しはある	4	20%
3.ない	15	75%
計	20	100%

【専攻科の学習・教育到達目標に関する設問】

専攻科の学習・教育目標に関して、企業の視点から不要と考えられる項目の有無についての調査を行った。回答のあった 20 社中 5 社より不要な項目が「ある」との回答があった。不要な項目が「ある」は 25%で、前回調査の 20.8%、前々回調査(平成 29 年度)の 10%から増加傾向にある。今後の注視が必要と思われる。

一方、企業の立場から見て取り入れることが望ましい事項についても調査を行った。回答のあった 16 社中 12 社より取り入れることが望ましい事項が「ある」との回答があった。取り入れることが望ましい事項が「ある」は 75%で、前回調査の 86%、前々回調査の 85%であったことから業の立場から付加すべき項目が経常的にあることがうかがえる。特に「高度なコミュニケーション力」では 100%(12 社中 12 社)となっており回答のあった企業では重要視されていると言える。また「高度な専門の知識・技術」は 50%、「技術と社会科学を融合させる知識」と「高度なものづくり(設計・製造)技術」はいずれも 41.7%であり、これらも回答のあった企業では望まれていることがわかる。

【自由意見】

今回は、27 件の意見が寄せられ、前回調査の 27 件、前々回調査の 21 件と同程度であった。内容は多岐にわたっているが、高専卒業生・修了生が有する専門知識、技術力における長短所の指摘、人材育成に関する要望・意見、期待感等、貴重な意見として真摯に受け止める必要がある。

2.7 大学等アンケート

大学等アンケートは令和3年度にはじめて実施した。実施状況は表 2-7-1 のとおりである。本アンケートは1月に書面（郵送）で依頼を行い、google forms を利用して実施している。

表 2-7-1 大学等アンケートの実施状況一覧

	実施時期	調査数	回答数	回答率（％）
令和3年度	令和4年1月	23	13	56.5

【回答数】

本科から3年次編入および専攻科から大学院入学のアンケートを行った。今年度は23大学に送付して、13件の回答が得られた(大学3年次編入10件、大学院入学3件)。回答率は56.5%であった。

【日本技術者教育認定機構(JABEE)の認定終了に関する設問】

本校は令和2年度をもって日本技術者認定機構(JABEE)の継続審査を受審しなかった（JABEE認定が終了した）ことを踏まえて、継続審査をしなかったことに関して調査を行った。本設問については3年次編入を受け入れた場合のみの設問で、回答状況を表 2-7-2 に示す。「わからない」との回答が半数を占めている。「継続の必要性は感じない」が30%であり、「その他」のコメントもJABEEの継続に対して懐疑的で、「継続した方が良かった」という回答は0であることから、JABEEを継続しなかったことに対して否定的な意見はほぼなかった。

表 2-7-2 JABEE 認定終了に関する回答状況

1.継続した方が良かった	0	0%
2.継続の必要性は感じない	3	30%
3.わからない	5	50%
4.その他	2	20%
計	10	100%

その他のコメント

- ・今後 JABEE の高等教育機関における位置づけ、重要性が変わるかもしれないので予測できない。
- ・私たちの大学もマレーシアが国費留学生を受け入れる条件として JABEE 受審が要件になっているため受審はしていますが、多大な手間と費用をかけて JABEE 認定を取っても、学生が就職等で有利になることもなく、社会的な認知も低いいため本当に必要な制度なのかなと懐疑的です。

【ディプロマ・ポリシーに関する設問（本科）】

平成29年度より制定した本科のディプロマ・ポリシーに関する調査を行った。重要度の高いものを複数回答で選択してもらった。回答状況を表 2-7-3 に示す。大学の立場からは、いずれも50%以上が重要であると回答をいただいております。「幅広い工学に…」と「自己啓発・能力向上に…」でいずれも70%、特に「専門工学に…」では80%となっており、3年次編入時の専門工学の能力が重要視されていることがうかがえる。また、少数ではあるが研究倫理に関する内容があってもよいとのご意見もあった。

表 2-7-3 本科のディプロマ・ポリシーに関する回答状況

1.幅広い工学に…	7	70%
2.専門工学に…	8	80%
3.自己啓発・向上能力に…	7	70%
4.多様な価値観を理解し…	5	50%
5.国際社会で活躍できる…	5	50%
計	32	

【ディプロマ・ポリシーに関する設問（専攻科）】

平成29年度より制定した専攻科のディプロマ・ポリシーに関する調査を行った。本科と同様に重要度の高いものを複数回答で選択してもらった。回答状況を表 2-7-4 に示す。いずれの項目も重要であるとの回答であった。

表 2-7-4 専攻科のディプロマ・ポリシーの重要度に関する回答状況

1.物事を多面的に・・・	1	33%
2.工学の基礎知識・・・	3	100%
3.課題の探究能力に優れ・・・	1	33%
計	5	

【卒業生に関する設問】

本科卒業生の入社時の学力、資質・能力に関しての評価に関する調査については、回答状況を表2-7-5に示す。編入学時の学力、資質・能力については、「満足」と「おおむね満足」で90%であり、満足度は高いことがうかがえる。

表 2-7-5 本科卒業生の編入学時の学力、資質・能力に関する回答状況

1.満足	2	20%
2.おおむね満足	7	70%
3.普通	0	0%
4.やや不満	0	0%
5.不満	0	0%
6.わからない	1	10%
計		

【修了生に関する設問】

専攻科修了生の大学院入学時の学力、資質・能力に関しての評価に関する調査については、回答状況を表2-7-6に示す。全ての回答が「満足」または「おおむね満足」であった。

表 2-7-6 専攻科修了生の大学院入学時の学力、資質・能力に関する回答状況

1.満足	1	33%
2.おおむね満足	2	67%
3.普通	0	0%
4.やや不満	0	0%
5.不満	0	0%
6.わからない	0	0%
計	3	100%

【専攻科の学習・教育到達目標に関する設問】

専攻科の学習・教育到達目標に関する調査を行った。大学等の立場から見て不要な項目を複数回答で選択してもらった。回答状況を表2-7-7に示す。「不要な項目は無い」との回答であった。

表 2-7-7 専攻科の学習・教育到達目標に関する回答状況

A-1. 多面的考察力:物事を多面的に考察できること	0	0%
A-2. 高い倫理観:技術者としての倫理観を確立できること	0	0%
A-3. コミュニケーション能力:日本語および外国語によるコミュニケーションを適切にできること	0	0%
B-1. 工学の基礎知識:工学の基礎知識を専門に応用できるまで理解できること	0	0%
B-2. 工学の専門知識:工学の専門知識を深く理解できること	0	0%
B-3. 実践力:実験・実習等を確実に実践できること	0	0%
B-4. 工学の学際的知識:工学の学際的知識を専門知識に活用できる程度に習得すること	0	0%
C-1. 課題探究力:現状を進展させるための課題の探求・理解が自らできること	0	0%
C-2. 課題解決力:様々な問題に対処できるデザイン能力を習得すること	0	0%
4.不要な項目はない	3	100%
計	3	100%

【専攻科の学習・教育到達目標に取り入れることが望ましい事項に関する設問】

専攻科の学習・教育到達目標に取り入れることが望ましい事項に関する調査を行った。大学等の立場から見て、学習・教育到達目標に取り入れることが望ましい事項を複数回答で選択してもらった。回答状況を表 2-7-8 に示す。いくつかの事項を取り入れることが望ましいとの回答いただいた。また、自由意見として「国際的コミュニケーション力」や「グローバルな視点」についてのコメントもあった。

表 2-7-8 専攻科の学習・教育到達目標に取り入れることが望ましい事項に関する設問

1.高度な専門の知識・技術	2	67%
2.地球環境問題に対応する知識	1	33%
3.人間科学・生命科学の知識・技術	0	0%
4.地域固有技術	2	67%
5.技術と社会科学を融合させる知識	1	33%
6.起業家育成	0	0%
7.高度なものづくり(設計・製造)技術	2	67%
8.高度なコミュニケーション力	1	33%
9.その他	0	0%
計	9	

【自由意見】

本科卒業生・専攻科修了生に関する自由意見は 7 件(本科 6 件,専攻科 1 件)あった。おおむね、高専での教育に好感を持たれている印象を受けた。一方で、高専からの進学が少ないため、有明高専の卒業生という括りでの回答に疑問を呈されているご意見もあり、アンケート方法に関して検討する必要があるかもしれない。

3. あとがき

本校の教育システムならびに教育プログラムを継続的に改善・向上するために、本委員会が主体となってアンケートを実施し、集計・分析、報告活動を展開してきました。「本調査報告書」は、令和3年1月から令和4年1月までに実施したアンケートの報告書になります。

1. 5年生卒業時アンケート

令和3年3月の卒業生は、本校が平成28年度に創造工学科に改組した初めての卒業生になります。このため、それまでの継続的推移は見るのが困難であると考え、「創造工学科」の初期値となる分析結果を示しました。

「教育全般（教育内容・教育環境）」、「学習・教育到達目標の達成度」ではおおむね満足しているという評価が得られました。90%以上の高い満足度の項目がある一方70%程度の満足度の項目（ICT環境）があり、今後を注視する必要があります。また、コースによりばらつきも生じている状況から、今後継続していくようであれば学校としての改善が必要となる項目の種となりますので、今後を注視していく必要があります。

2. 専攻科修了時アンケート

令和3年3月の修了生アンケートでは、アンケートの回収率が11%ときわめて悪いものとなりました。令和2年度の分析は参考値としての記載とせざるを得ない状況で、大変申し訳ございませんでした。アンケートの実施・分析の継続がある意味途切れてしまうことは非常に残念な結果です。同じことを繰り返してはならず、経緯とその分析が重要と考え、これを行いました。本アンケートは本委員会が主体的に実施してきました。その中で、効率化と分業化も進められてきましたが、その中で縦割りが進行してしまい、自分の担当以外への意識が希薄になっていった部分があったのではないのでしょうか。たとえ希薄になっていたとしても、委員長が総括していれば問題がないはずですから、委員長の交代時期と重なったことも一因ではないのだろうか、と考えています。慣れに流されることなく、継続的に改善を行っていくシステム構築が肝要であることを痛感しています。本校の組織運営において、年度が変わる際、特に新しい教職員に引き継ぎが行われる場合、「問題が先送り」や「問題が尻切れ状態」といった「引継ぎが不十分」でないこと、すなわち、今回の回収率の悪さが不幸にも起こってしまったことであり、氷山の一角ではないことを切に望みます。

3. 新入生アンケート

令和3年4月の新入生アンケートでは、例年と大きく変動する項目はありませんでした。新入生の受験決定時期や志望動機を聞いたアンケートですので、令和4年度入試に活かされる時期での報告を行う必要があると考えています。なお、本アンケート結果は教務と連携しており令和4年度入試に活かされているとは考えていますが、新年度では「新入生アンケート」結果は早い時期に報告をしたいと考えています。

4. 4年次編入学生アンケート

令和3年4月の4年次編入学生アンケート（令和3年7月実施）では、例年と大きく変動する項目はありませんでした。なお、注視項目としては、志望動機に経済性が急伸していることがあげられます。こちらも新入生と同様に早い時期での報告を行う必要があると考えていますので、令和4年では3月にアンケートを実施している状況です。

5. OB・OG アンケート

OB・OG アンケートではここ2回は一桁パーセントが続いていましたが、15%まで倍増したことは望ましく思っています。まだ、改善の余地がある状況ですので、更なる回収率アップの方策を講じる必要があります。今後の大きな課題と考えています。今後の動向を注視する必要がありますが、「教育における到達度、満足度の評価に関する設問」では大幅なポイント増がありました。また、卒業時・修了時に身に付けておかなければならない能力として「コミュニケーション能力」をあげられています。このことは継続してあげられていますので、アクションを起こすこと（PDCAを回すこと）も考えていただきたい。

6. 企業アンケート

企業アンケートでは回収率は平成 15 年以来の最高の値（41%）となりました。まだ、改善の余地がある状況ですので、更なる回収率アップの方策を講じる必要があります、今後の大きな課題と考えています。

本校では JABEE の継続審査を行いませんでした。そのことへの企業からの回答は 7 割が「わからない」でしたので、企業として JABEE 認定がよくわかっていない状況が見て取れました。また、「継続した方が良かった」「継続の必要性は感じない」は拮抗している状況でしたが「継続の必要性は感じない」が若干多い状況でした。

卒業生・修了生とも「入社時の学力、資質・能力」については高い満足度（80%以上）でした。この状況は連続して続いており、良好な状況と考えています。

専攻科の「専攻科の学習・教育到達目標」では、不要なもの、足りないものという指摘があがっています。このことは継続してあげられていますので、アクションを起こすこと（PDCA を回すこと）も考えていただきたい状況です。

7. 大学・大学院アンケート

大学・大学院アンケートの回収率は 57%でした。回収率は改善の余地がある状況ですので、更なる回収率アップの方策を講じる必要があります、今後の大きな課題であると考えています。

本アンケートは新たなアンケートであり、初期値となる分析結果を示しました。

本校では JABEE の継続審査を行いませんでした。そのことへの大学・大学院からの回答は 5 割が「わからない」でしたので、大学・大学院として JABEE 認定がよくわかっていない状況が見て取れました。また、「継続した方が良かった」の回答はなく、大学・大学院では「継続の必要性は感じない」状況が示されました。

本科のディプロマ・ポリシーにおける重要度はすべての項目で 50%以上でした。中でも「専門工学の能力」が 80%を越えており、3 年次編入時の専門工学の能力が重要視されていることがわかりました。専攻科のディプロマ・ポリシーにおける重要度もすべての項目で回答ありましたが、「工学の基礎知識、工学の専門知識および高度に融合された学際的知識を有し、実践力に富む高度な技術者」が 100%であり、大学院入学時にこれらの能力が必須であることがわかりました。

本科卒業生の編入学時、専攻科修了生の大学院入学時の学力、資質・能力に関する評価は概ね良好でした。今後の継続していくことが望まれます。

本調査報告書が、関係組織・部署、各教職員の学校の教育システム・プログラムの継続的改善・向上に資することを切に願っています。そのためには、本調査報告書を用いて本校の教育システム・教育プログラムに対する学内外からの評価を適確に掌握して頂き、そして、各関係組織・部署等で共通認識に基づいた改善・向上が実現できますことを期待します。また、本校で種々のアンケートが実施されていますが、「取りっぱなし」、「集計して終わり」という事象がないかは今後チェックしていく必要があると考えます。アンケート収集には「目的」があり、その目的の達成の判断材料がアンケートですから、アンケート結果から問題点を洗い出し PDCA を回すことがアンケート収集の重要なことです。本校の各部署におかれましては、1 年間の活動やアンケート結果を運営会議に報告し、運営会議で学校運営に活かす議論をしていくことが重要であると考えています。

最後に、各種アンケート調査にご協力・ご尽力、ならびにご支援頂きました関係各位・各組織に深く感謝の意を表します。

自己点検・評価委員会

委員長 小林 正幸（創造工学科）

清水暁生・篠崎 烈・松野良信・加藤浩司（創造工学科）・竹内 伯夫（一般教育科）

事務担当 七田 忠資（総務企画係）